

## 血液透析導入時における悪性腫瘍スクリーニングの有用性

小谷野爽音、稲田ちひろ、山中大詩、王麗楊、谷野彰子、立田浩、山田佐知子  
(大阪府済生会茨木病院 腎臓内科)

末期腎不全患者では悪性腫瘍は重要な合併症であり、死因の一つである。透析導入患者では、透析導入半年以内の悪性腫瘍の診断が多いことが報告されており、血液透析の導入時点ですでに悪性腫瘍が存在している可能性がある。しかし、透析患者における悪性腫瘍スクリーニング検査に関して質の高いエビデンスは存在せず、頻度、方法についても確立していない。悪性腫瘍スクリーニングとしての便潜血検査（FOBT）、上部消化管内視鏡検査（EGD）は透析患者で実施率が低いため、過去の報告では有用性が評価されなかった可能性がある。また、日本では無症状透析患者でこれらの検査の施行率をまとめた報告もない。そこで我々は、2022年1月から2024年12月までに当院で維持血液透析を開始した86例を対象に、透析導入前後における悪性腫瘍の検出状況とスクリーニング検査の有用性を検討する単施設後ろ向きコホート研究を行った。血液透析導入前後3か月以内に診断された悪性腫瘍を評価し、コンピュータ断層撮影（CT）、FOBT、EGDの実施率を調べた。加えて、導入時のヘモグロビン値（Hb）およびトランスフェリン飽和度（TSAT）を含む貧血に関連した項目を評価し、悪性腫瘍の有無で比較した。CT、FOBT、EGDの実施率はそれぞれ93.0%、69.8%、66.3%であり、研究期間中に4例の悪性腫瘍が診断された。4例中3例はそれぞれCT、FOBT、EGDにより早期で診断され、治癒に至った。一方、HbおよびTSATを含む貧血に関連した項目は、悪性腫瘍の有無で有意差を認めなかった。以上より、透析導入患者において、貧血に関連した項目は悪性腫瘍スクリーニングとしては有効とは言えず、CT、FOBT、EGDを組み合わせることで一部の患者において癌の早期発見に寄与する可能性がある。